

ドイツの教科書に見る家族

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤沢, 法暎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/660

ドイツの教科書にみる家族

藤 沢 法 咲

Familie in deutschen Schulbüchern

Hoei FUJISAWA

I “家郷喪失”の時代

——はじめに——⁽¹⁾

「地域・家庭の教育力の衰退」が日本の教育界の一部で深刻に問題視されるようになったのは1960年代半ばからである。その直接の契機となったのは当時の国民教育研究所研究会議長上原専禄の問題提起であった（国民教育研究所『年報』1963年度）。

上原は次のように述べている。

「実際の民衆の生活が、その生活と仕事が、日常的に営まれ、そこでその生活が守られ、繁栄していかなくてはならない。そういう集団としての地域というものが、中央の眼からみると、中央の政策を遂行するための現場、つまり地域は中央から見ると地域ではなく、『地方』としか考えられない。そこで庶民の生活が成り立ち、民衆の仕事が展開され、そこで幸福が追求されていく、そういう地縁集団というものもつ具体性を破壊して、中央の利益を遂行していく場にしていこうとする。……

地域というものは単なる中央の下請け機関であるのか。そうだとすると、住民の、住民という名前の民衆の自発性、内発的生活要求とか、あるいは仕事への要求とか文化要求とかいうものはその内発性において、自主性において尊重されないでもよいというのか。……

地域というものは『地方』化され、……地域における生活と仕事の実際性、そういうものを観念化し、抽象的なものにしていくという政

策がだされています。……

そうした地方化政策に抵抗する…拠点として、国民が本当に国民のための教育、国民のための文化、それを創り出す文化の拠点として地域をとらえていく、あるいは源泉に地域をしていく…、単なる研究上の作業概念としてではなく、日本の国民生活を進めていくための拠点的な、現実の場として考える。つまりひとつの価値としてお考えになるかどうか。」

これが後に「地域の『地方化』・生活の抽象化」と要約された上原の有名なテーゼだ。

人間の社会化（Socialization）の主な母体は、家庭・地域・学校の三つだ。とくに家庭・地域が伝統的にはベイシックだった。

近代という時代（あるいは、国民国家を伴う資本主義という社会システム）は、一方で学校を通じて「公」（共同体の存続・繁栄に関わる事柄。国家に力点をおいて理解される場合が多い）の意識を育てつつ、他方で「公」の意識にとってよりベイシックな家庭・地域という伝統的共同体の解体を進める。宮本常一はすでに1943年、『家郷の訓』において明治期に比べ、大正・昭和と時代を追って家郷の訓、すなわち地域・家庭の教育力が衰退してきている事実を指摘している。

いや、宮本に限らず、1930年代から40年代初頭にかけて、若い世代の教育に関心を寄せる人々の中には同様の問題意識を持つ者は少数とはいえ存在していた。教育学者では宮原誠一、梅根悟ら。戦後、宮原はその学説を「社会の形

成力は、学校の教育力よりも基底的である」と定式化し、梅根はルソー、ペスタロッチの系譜をひく「生活教育論」で知られる。両者は60年代には国民教育研究所研究会議員であり、上原らと共に「地域に根ざす教育の創造」に向けて活発な理論活動を展開する。

しかし、60年代から70年代にかけて、史上前例のないスピードで展開した産業構造の大転換（＝工業化・都市化・経済成長）の過程で、地域・家庭の解体も急テンポで進み、「地域・家庭の教育力の衰退」にブレーキをかけ、地域さらには日本を住民の側から再構築しようとする理論的・実践的営為も、その足がかりを見失っていく。しかも産業構造の大転換は、学校の役割を肥大化させ（「学校化社会」の到来）、日本のほとんどすべての若者を受験戦争に駆り立てることとなった。

高度消費社会、高度情報社会、学校化社会など高度大衆社会の諸特徴が日本列島を覆った70年代後半以降、ミーイズムが蔓延する一方で、一部の若者には“共同性”への飢え、“公”の世界への憧憬が広がる。学生運動・青年運動（そして労働運動）が一定の活力を持っていた70年代前半までは、若者には「身捨つる程の祖国はありや」（寺山修司）と問いつつ、なお、未来に構築すべき新しい社会に“公”の観念の一応の話しようがあったのだが…。

民主主義は、制度であると同時に思想であり運動である。思想・運動としての民主主義は、祖国（よりベシクには家郷）という“公”の観念によって担保される。高度大衆社会は、一方では家郷を解体し、他方では私的欲望を無制限に刺激して“公”の観念を衰弱させた。

80年代のバブルの時代、日本の草の根のナショナルイズムは風化したといわれる。「地域・家庭の教育力の衰退」を憂慮していた人々も（私もその一人だが）、時代の急激な変化、国民・住民の自治能力の否定しようのない衰弱を前に、結局のところ、立ちすくんでいたと言わざるをえない。

だから、今日の教育の問題、若者の問題、総じて日本社会の閉塞の問題を打開するためには、一方では“家郷”の再構築（ないし新たな創造）の問題が、他方では未来に構築すべき“この国のかたち”（司馬遼太郎）が、あらためて真剣に問われねばなるまい。閉塞の時代を突破する主体的エネルギーをどこにどう求めるかという難問と共に。

もとより以上のような把握は、人間の社会化にとって、そもそも人間にとって、人間関係の直接性つまりは共同体的紐帯が不可欠だとの前提に立っている。一方では共同体を否定的に見る論者も多く、また共同体の再建ないし創造には現実性がないとする論も有力であることは、念のため指摘しておこう。

いうまでもなく問題は大きく、かつ重い。しかも、この問題はかなりの程度、先進工業国共通の問題でもある。日本の場合、あまりにも急激な、しかも「一極集中型」の経済成長が問題をいっそう困難にしているが…。

本稿では、以上のような問題意識を前提におきつつ、とりあえず、日本としばしば対比されるドイツの社会科教科書が、「家庭」の問題を今日どのように取り上げているかに注目してみたい。連邦国家ドイツの場合、周知のように、教育行政権は原則として州にあり、教育内容（従って教科書）は州によりある程度異っている。ここで取り上げるバーデン・ヴュルテンベルクは、フランスやスイスと国境を接するドイツ南部のカトリック系の州で、比較的伝統的な生活様式にこだわりのある地域といつてよいだろう。

II ドイツの教科書にみる若者の生活

——『昨日・今日・明日』に即して——

ドイツで「公民科」が教科として登場するのは第一次大戦後であり、当時は通常、「歴史科」の現代史教育の中で現代の政治・経済などを併せて取り扱う形が採られた。今日のドイツでは、「公民科」は「社会科」(Sozialkunde, Ge-

meinschaftskunde) または「政治」(Politik) と呼ばれているが、やはり歴史教育と関係があり、州により学校種によっては「歴史」と「社会科」とが教科書も1セットになっている場合がある。バーデン・ヴュルテンベルクの普通学校 (Hauptschule⁽²⁾…第5学年から第9学年) でも両者が1セットになっている。以下、クレット社発行の普通学校用「歴史・社会科」教科書『昨日・今日・明日』に即して、まずドイツの教科書が家庭・学校・地域における若者の生活をどのように描いているかを見ておこう。この州の普通学校で「歴史・社会科」が学習されるのは第6学年から第9学年で、社会科 (Gemeinschaftskunde) が登場するのは第7学年からだ。第7学年の教科書には社会科の最初の章として、「若者たちの生きる世界」というパートがある。以下、その一部を抜粋して紹介しよう。

「わが国の若者は、ぜいたく好みで、マナーが悪く、権威を軽蔑し、老人を尊敬しない。いまの子どもたちは暴君で、年長者が部屋に入ってきて立ち上がろうとはせず、両親に反抗し、食事の際にペチャクチャしゃべり、教師に対し傍若無人の態度をとる”。ギリシアの哲学者ソクラテスが若者についてこう嘆いたのは、約2500年前のことだ。

青少年期は、さまざまな葛藤で特徴づけられる。若者は、自分自身を、自分自身の生きる道を探し求めている。若者は帰属したいと思い、しかも自立したいとも思う。社会性と孤独とが交錯する。学校でのさまざまな難問に加えて、新たな、個人的な問題が浮かび上がってくる。初めての愛の痛み、不確実性、それに自信不足。

大人として生きるまでの道程には、学ぶべき多くの事柄がある。あちこちにつつかることなく自分を主張する術 (すべ)、自分を従属させることなく帰属する術、自意識と自慢とを混同しない術など。そして最終的には責任を負うことができなくては。家庭で、学校で、友達間で

——そして自分自身に対して。」⁽³⁾

「若者たちの生きる世界」は、こんな書き出しで始まっている。そして家族は、次のように記述されている。

「僕の家族と僕

僕の家族は、両親と妹のバルバラ、祖父母それに僕だ。僕たちは、町の郊外の庭つきの家に住んでいる。祖父母は2階で生活しており、妹と僕は屋根裏部屋にそれぞれ個室を持っている。僕の名はシュテファン、14才で普通学校の7年生だ。好きな教科は生物、わが家にバラがあるからだ。僕がバラに庭師になるつもりだ、というバラは、きっとご両親が喜ぶよ! と言ってくれた。それを父にどう伝えたものか、僕にはまだ判らない。

僕は余暇を友人のペーターやオリヴァーと過ごしている。僕らは地域の体育協会所属の青少年サッカークラブでプレーしている。僕はフォワードだ。他に僕は、僕らの音楽隊の行進の時にはトランペットを吹く。夏には僕らはさまざまな祭りに出場する。そのため僕は家を空けることがしばしばだ。だから、母が期待している家事の手伝いに割ける時間は、あまりない。しかし祖母は、男は大人になれば家事の手伝いなどしなくてもよい、そのために男は結婚するのだから、と言っている。

僕の父は40才を若干過ぎており、大きな会社で電気技師として働いている。父は、僕も電気技師にと思っているので、僕を父の会社の見習工にしたがっている。父は仕事を終えると、サッカーを観戦するのが大好きだ。現役時代はレフトウィングだった。父は大部分の時間をホビールームで過ごす。誰も邪魔してはいけない。僕の母は、大体父と同じくらいの年齢だ。週に一度ヨガに行く。夜、母はテレビのところで、僕らのセーターを編んでいる。母は以前公証人と結婚し、彼の事務所働いていたことがある。離婚した後、娘のイングリットは前夫のも

とに留まった。彼女はもう20才で、時々母の誕生日などにわが家を訪れる。イングリットから僕はテニスを教わった。

僕の妹のバルバラは、普通学校の5年生だ。食事のあと、僕は妹の宿題を見てやらなくてはならない。僕は毎週水曜日に妹をテニスに連れていく。プレーしたあと、彼女はボールをていねいに拾い集めるので、僕は代りにアイスクリームをおごってやる。妹の部屋は、僕の部屋とは対照的に、きちんと片づいている。僕の祖母は、妹はいまでも、しっかり者で几帳面だから、将来りっぱな主婦になると言っている。

祖母は60才を過ぎているが、わが家の炊事はたいがい引き受け、母の家事を手助けしている。祖母は時々母に、子どもはもっと厳しく教育しなくては、と勧めている。

祖父は鉄道員スポーツクラブのメンバーで、よくハイキングに参加する。彼は何キロも歩き、その上歩調は少しも乱れない。父も見習ってくれるといいのだが。旧い鉄道員らしく、祖父は蒸気機関車を集めている。祖父は僕たちに自分の戦争体験をよく話してくれる。」(4)

そして例えばこんな解説がのせられている。

「家族は何をやっているのだろうか？」

家族は人間が生きていく上での最初の集団だ。家族の中で子どもは母語を覚え、マナーや道徳観を身につける。子どもは、食べ方、衣服の着方、立ち居ふるまいを身につける。模倣することで、遊びの中で、また、ほめられたり、叱られたりすることで、子どもは家族の構成員が自分に期待しているものを果たすことを覚えていく。家族は、子どもの愛情や安らぎへの要求を満たしてくれる。人間にとって、他者を頼りにする最初の経験だ。

家族は、人間に一生続く特徴を豊富に刻みつける。家族は、大人の人生設計、職業選択にも影響を与えるし、時には生涯の伴侶の選択や自分の習慣にも影響を与える。人は家族の中で教

育されることによって、あとで大人になってから自分の生活をコントロールできるのだ。つまり“社会性”が身につくのだ。

年長になるにつれて、さまざまな集団が人格形成に影響を与えるようになる。友だち仲間、学校、それに職場での同僚たち。

家庭での教育の目標は、さまざまだ。その家族が生活しているのが農村か都市か、両親がどんな教育を受けてきたか、彼らにとって何が重要か、などによって左右される。教育の目標は、時代とともに変化している。従順、適応、勤勉そして几帳面さが、私たちの祖父母にとっては、もっとも重要だった。

教育の方法も今日では変化している。罰で脅したり、命令や強制で権威的に教育することもあれば、寛容さや対話、それに模範を示して見せることで教育することもある。……」(5)

ほかにも「家庭の中の自由な空間」、「みんなと一緒に取り組む」、「時には争いも起きる」などの項があり、最後の項では家族の中で生じる争いごとの具体例を挙げ、葛藤のベターな解決策を探るために、クラスでロールプレーをやってみることを勧めている。

「家族」の次は「学校」だ。

「僕の学校と僕

学校のクラスとグループ……

クラスは、生きるということを教えてくれる。一つの集団の中で、人は多くのことを学ぶ。他者とコンタクトをとること、自分の意見を主張すること、秩序に従うこと、譲歩すること、葛藤を解決すること、公共のために課題を引き受け、それに対し責任を負うこと。

期待も、能力も、関心も異なる者同士の間では、寛容さと心配りが必要だ。教師や同級生との交流の経験は、知己・友人に対する態度や未知の人々との交際にも影響を与える。

一つのものを作り上げるにも、さまざまなやり方がある。その際、生徒のさまざまな能力に

目を向ける必要がある。クラス討論は、全員の参加を促し、一人一人がクラスの前で発言する勇氣、しかも、もしかするとオープンな形で批判されることをも受け入れる勇氣を発揮しなければならない。独り作業 (Stillarbeit) の場合、誰もが自分に課題を設定しなければならない。共同作業 (Partnerarbeit) の場合、他者の誤りを相手を傷つけずに指摘する心配りと、同時に仲間だからといって公正さを失わない勇氣とが求められる。集団作業の場合、チーム精神が前提で、助け合いや妥協の用意が必要だ。誰だって良い結果をめざしているのだから。」(6)

さらに「社会に開かれた僕の学校」という節には、次のような記述が見られる。

「SMV (生徒会)⁽⁷⁾ の諸活動

積極的な生徒は、学校を活性化する。SMVを通して、学校生活を生き生きとしたものにする責任は生徒たちが担っている。クラスの遠足、スポーツ祭、農村滞在体験、スキー実習、それに各種競技への参加は、学校生活を変化に富んだものとする。

普通学校卒業資格を取るために、あるいは進んで第10学年まで学び中級資格を取るために準備するのを援助する活動も、魅力的な余暇活動の提供も、要するにカフェテリアで友だちに悩みを打ち明けたり、希望を語ったりする会話も、すべてが本来生徒たち自身の手で楽し上げられた“学校”という生活空間から生まれるのだ。」(8)

「開かれた学校 (EBA)

普通学校は大きな、多面的な社会だ。それは生徒、教師そして両親の協力で成り立っている。それに事務員や守衛も、しばしば参加して助言や行動で援助している。

“開かれた学校”略して“EBA”は、両親にも学校生活に参加する機会を提供する。彼らは講習の指導を引き受けたり、生徒や教師と一緒にサークル活動を行ったりする。

EBAの事業は社会の活動で、そこで生徒は

自分自身の関心や能力を認識し、集団意識を発達させたり、有意義な余暇活動を経験したり、場合によっては自分の将来の職業を発見したりもする。

校庭の整備、難民の子どもたちの世話…などのプロジェクトを通して、生徒、両親それに教師は、学校を変えるだけでなく、地域の生活も変えていく。

サークル略して“AGs”では、自分の好きなことや関心事を深く追求できる。ダンス、器楽演奏、演劇、スポーツ。それにAWT教科(労働、経済、技術)に関する中身のものもあり、サークル版生徒新聞は広く普及している。

学校菜園の世話といった“学校の追加的活動”には、両親も協力している場合が非常に多い。さまざまな団体と協力して行う校外の“ボランティア活動”でも同様だ。」(9)

「学校と地域社会生活

普通学校は、たいがい生徒やその家族の住所の近くにある。だから学校は、地域社会の重要な一部であり、本来、地域社会生活の一翼を担っている。

多くの普通学校は、さまざまな地域の団体と活発に交流している。スポーツクラブ、素人劇団、町の聖歌隊、ブラスバンド、あるいは自然保護団体など。地元の祭りや教会の祝祭に参加したり、あるいは森のはずれや遊び場のゴミを片づけることで環境保護運動を進めるなど、普通学校には地域社会生活に力を合わせる機会がたくさんある。

授業でも地域やその周辺は、くり返しとり上げられている。それで地元の出来事が、より良く理解できる。」(10)

さて、地域で友だちと過ごす自由時間(余暇)については、次のように記されている。

「僕の友だちと僕

友だちは大切だ

友だちによって生活は、いっそう変化に富ん

だものになる。誰もが違った能力や関心を持っている。性格もさまざま。友だちを持つ者は、友だちのお陰で素敵な体験をすることも、ひどいことに耐えることもある。一緒にやれば何事につけ、いっそう容易になる。

世界を別の目で見ることでもできる。ある者にとっては自分だけでは解決できそうになく、気分が重くなるような事柄の幾つかは、他の者にとっては格別の問題ではなかったりもする。友だちは助言してくれるし、一人で考えるよりは何人かで考える方が、良い知恵がでる。

友だちがいると、争い方も学ぶことができる。友だちの目を借ると、自分のこともいっそう良くわかってくる。友だちは、私たちに時々、これまで自分では知らなかったページを開いて見せてくれる。……」(11)

そして地域には、友だちと自由時間を過ごす施設も、さまざまな形で存在している。

「私たちの地域の余暇のための施設や催し物どの地域にも、若者や大人が余暇を過ごすための施設や催し物がある。施設の数や種類、催し物の日程の豊富さは、地域（自治体）の規模や若者をも含む住民の参加にかかっている。

クラブが地域の生活を形づくっている。

スポーツ場であれ屋外プールであれ、フィットネス・センターであれ映画館であれ、ハイキング道路であれ庶民劇場であれ——施設・サービスを用意し維持するのは、たいいていクラブである。……

教会関係の組織、郷土連盟、音楽サークルなども四季の祭典で催し物をやり、民俗衣装や伝統的な風俗を維持しており、キリスト教団体、赤十字、労働者福祉協会は、病人や貧しい人々、マージナルな人々のために極めて多様な援助活動や慈善事業を心がけている。

ほとんどすべてのクラブに、独自のプログラムを持つ青少年グループがあり、すぐメンバーにならなくても、“こっそり入って様子をうか

がう”こともできる。会費は安く、違う年齢集団や違う種類の学校の若者たちとの出会いもある。

余暇を過ごす場所

ある程度の規模の自治体では、若者のために青少年センター（Jugendzentrum）を設置し、相談員を配置し、スポーツや遊びのさまざまな施設を設けている場合が多い。プログラムや空間をどう使うかは、若者たちに委ねられている。週末や休暇には、かなりの若者グループが、町を離れて、青少年の家や他の余暇施設に向かう。それはしばしば、昔の城であったり、大きな農家であったり、丸太小屋つきのキャンプ場であったりする。そこには台所、休憩室、トイレが付いている。たいがい弓技場や遊べる芝生があり、暑い夏の日涼むためのプールもある。夜にはキャンプファイヤー場集って、グリルをしたり歌ったりもできる。雨の日は休憩室が快適だ。卓球もできるし、おしゃべりを楽しんでもよい。たいいてい自炊用の良く整った台所がある。宿泊費は安い。」(12)

この教科書は次に、生徒会長が学校新聞にのせるため、青少年センターの相談員にインタビューする模様が記されている。その一部を紹介しよう。

「あなた方の青少年センターでは、どんな施設が利用できますか？」

“ビリヤード台、卓球台、サッカーゲーム台、将棋やダイス、コンピューターゲーム、写真用暗室、それに工作や大工仕事のための作業室、スクリーンのある視聴覚室、テレビ、ビデオレコーダーなどです。外ではバーベキュー場がたぶん見えたでしょう。ちょうど弓技場のわきで、サッカーゴールやバスケットボールのネットもあります。来年にはスケートボード・バーンもできるはずです。”

“ずいぶんたくさんありますね。どういう理由で青少年センターにやってくるのですか？”

“さまざまですね。要するに、ここのカフェでおしゃべりしたいのもいるし、ここのディスコで踊りたいのもいる。自分でディスクジョッキーをやりたいのも、ボリュームを上げてヘビメタを楽しみたいのも来る。家ではできませんのでね。隣近所に迷惑をかけずに、ここの練習室で例えばトランペットを吹くために来る場合なども少なくありません。”⁽¹³⁾

催し物は、ずいぶんたくさんある。3か月に1回プログラムが配布される。映画、スポーツ競技、エイズ・国防軍・セックスなどのテーマでの講演会、護身術の講習会、日帰り旅行、あちこちの都市ツアーなどだ。話はまだまだ続くが、この辺にしておこう。

「若者たちの生きる世界」には、以上に紹介した家族・学校・地域のほかに「わが国の外国人」、「若者と中毒の危険性」といったパートもあるのだが、ここでは省略する。

なお、普通学校の社会科では第9学年で「家族」の問題が、その変容に即して、改めてとり上げられているのだが、それは次の節でふれることにしよう。

III ドイツの教科書にみる家族

前節では、クレット社の社会科教科書に即して、家庭・学校・地域の全体にわたる「若者の生活」を概観したが、本節ではバーデン・ヴュルテンベルク州で使用されている3種類の社会科教科書を対象に、「家族」がどう取り扱われているかを詳しく見ることにしよう。この州の社会科では、「家族」は普通学校では第7学年と第9学年（社会科の最初の単元と最後の単元）で、実科学校では第7学年で取り上げられている。日本でいえば中学校段階の社会科で、「家族」の問題がずいぶん重視されていることに、とりあえず注目しておこう。

以下、まず実科学校用教科書『政治(社会科)』（シェニング社）に沿って、「家族」がどのよ

うに描かれているかを紹介し、次に普通学校用教科書『二つの重点——歴史・社会科』（シュレーデル社）と『昨日・今日・明日』に即して、とりわけ近年ドイツでも著しい「家族の変容」がどのように取り上げられているかを見ることにしよう。

1 『政治(社会科)』にみる家族

この教科書が家族を取り扱う「家族のなかの若者」という章は、いずれも本文と「基礎知識」のパートから成る次の9つの節によって構成されている。

- a) 7文字の共同体(基礎知識：生活共同体)
 - b) 子どもたちには愛情が必要だ(基礎知識：両親)
 - c) 祝祭と支援(基礎知識：親戚)
 - d) 子どもたちには節度が必要だ(基礎知識：教育)
 - e) 家族は仕事をする(基礎知識：同権)
 - f) 家族は話し合う(基礎知識：共同責任)
 - g) 家族は家計のやりくりが必要だ(基礎知識：家計)
 - h) 子どもたちは国家にとって高くつくのだろうか(基礎知識：家族政策)
 - i) 家族は変容する(基礎知識：家族像)
- 以下、a) b) d) i) の節にしぼって、その内容を紹介しよう。

(1) 7文字の共同体

7文字の共同体とはFAMILIE(家族)のことで、Freude(喜び)のF,Alltag(日常)のA,Mutter(母)のM,Insel(島)のI,Liebe(愛)のL,Ideal(理想)のI,Erziehung(教育)のE、と解説されている。そして基礎知識はこう記されている。

「基礎知識：生活共同体

クロスワードパズルで7文字の生活共同体を問われた場合、答えは難しくはない。ほとんどの人間が家族の中で成長し、家族を特別の種類

なくとも二つの世代から成り立っている。つまり、生計を共にする両親と子どもだ。相互の交流の中で、極めて親密な関係が生まれ、家族のどの成員も他の成員の強みや弱み、好きなものや嫌いなものをたいてい熟知している。原則として家族は毎日顔を合わせ、極めて個人的な事柄、例えば睡眠、入浴、着替え、食事などの場合も身近にいる。お互いの極めて緊密な結合を通して、誰もが程度他者にたいして責任の意識を持っている。家族の誰かが亡くなったり、あるいは両親が離婚したりすると、他の成員からは通常、とても悲しいこととして受け止められる。成長した子どもが、例えば自分自身の家庭を築くために家族を離れる場合も、子どもと両親の間には特別の絆が、多かれ少なかれ持続するものだ。

子どもができると夫婦は、大きな責任を負うことになる。いまや家族の基本的諸課題が、確実に達成されなければならない。子どもたちは、扶養され保育されなくてはならない。子どもたちは、その後の人生に適切に対処できるように、教育され、子どもたちにふさわしい技能や知識を授けられなくてはならない。母親は自分の子にお乳を飲ませ、父親は自分の子を入浴させたり、おむつを当てたりする。両親は子どもをしつけ、ナイフやフォークを使って食事をしたり、道を通るときに正しく行動できるように教えたりしながら、これらの課題を果たしている。

子どもたちが生れ、健康で責任ある大人に成長して始めて、国家の存立は持続的に確保される。だから国家という共同体は、家族をきちんと特別に保護する。つまり国家は、法規（例えば家族法）により、財政的支援（例えば児童手当）により、また補助施設（例えば幼稚園）によって、家族の形成を促進し、その存続を支えている。……」(14)

（2）子どもたちには愛情が必要だ

以下、まず本文、次に基礎知識を記す。

「 (i)

13世紀のこと、皇帝フリードリッヒ二世は、誰からも話しかけられたことのない人間は、どんな言葉を話すのか知りたいと思った。そこで彼は恐ろしい実験を実行させた。乳母たちは子どもたちにミルクを与え、入浴させ洗ってはやるが、決して子どもたちに話しかけたり、遊んでやったり、あやしったりしてはならないこととされた。

実験は悲劇的な結末を迎えた。すべての子どもたちは活力を失い、結局死んでしまった。

(ii)

心理学者、医師それに教育学者は、1940年の爆撃の間、ロンドンの地下鉄構内で自分の母親と一緒に恐怖を経験した子どもたちを観察し調査した。これらの子どもたちは、精神障害の徴候は何ら示さなかった。

これとは逆に、農村やロンドン近郊に疎開しており、母親の保護なしに生きるしかなかった子どもたちは、様々な種類の精神障害に見舞われた。献身的に活動していた保母たちも、やがて感染にたいする抵抗力が弱まり、言語行動、社会行動、感動などで退行が目立つのをくい止めることができなかった。

(iii)

科学者が孤児院に入れられた小児を観察した。最初子どもたちは泣き虫になる。彼らは保育にあたる人たちにしがみつく。その後、泣き声はしばしば叫び声に変っていく。子どもたちの体重が減っていく。そのうち子どもたちは接触を避け、じっとベッドに横になっているようになる。彼らの睡眠は浅く、体重はさらに減り、病気にかかりやすくなる。表情のない顔が恒常的になる。いつのまにか泣くことをしなくなり、代わりにうめくようになる。動作は次第に緩慢になっていく。

(iv)

いずれにせよ、子どもの世話を何らかの意味で職業として営み、規定通りの労働時間、自由な週末と定期的な休暇を求める人々が、小さな

子どもの要求を満たせるとは考えにくい。……だから“プロの教育者”とは、家族の補完としては考えられるが、その代替としては考えられない。(シュポンケ「社会化と社会構造」より)

(15)

「基礎知識：両親

心理学者、医師それに教育学者は、多くの調査に基づいて、子どもたち（とくに最初の3年間）には安心、安全、愛されているといった感情が必要であることを明らかにしている。こうした贈物を子どもは、まなごしや皮膚の接触を通して、つまり、ほおずりしたり、なでたり、さすったりすることで経験するものだ。子どもに愛情豊かに話しかけることも、健全な発達には絶対に欠かせない。

少なくとも乳児が、愛情に満ちた贈物にほほえみで反応するようになった時、子どもは最初の絆を受け入れたのだ。母親もしくは他の恒常的養育者は、多くの好ましい体験を通して、結びついていくものなのだ。母親は、乳児にとって特別の地位を占める。彼女は引き受け人 (Bezugsperson) となる。彼女には特に多くの忍耐と理性とが求められている。乳児はまだ、もっぱら感情だけで生きているからだ。乳児は、孤独を感じたり、不安になったり、空腹になったり、痛みを覚えたりすれば、泣き叫ぶ。乳児は眠った後、また両親の顔を見たり、きれいにしてもらったり、食べ物をもらったりした時、一緒に遊んだり、笑ったりしてもらった時、喜ぶ。愛情豊かな贈物を通して、引き受け人は子どもに、この世界で歓迎されており、安全なのだという本源的な信頼感や安心感を与える。さらに何人かの他の人々（例えば父親、兄姉、祖父母）も、引き受け人になるだろう。

引き受け人がまったく欠けていたり、突然いなくなったり、あるいは、しょっちゅう変ったりすると、子どもの発達に重大な結果をもたらす可能性がある。子どもたちはそれによって、身体的にも、知的にも、心情的にも傷つく可能性がある。彼らは、病気に対する抵抗力が弱ま

るだけでなく、状況によっては、身体の発達にブレーキがかかったり、言語行動に著しい欠陥が現れたりする。大人の年齢に達するまで、こうした子どもたちは自意識が不足していたり、不安定であったり、接触を恐れたりする可能性がある。後に夫婦として、しっかりした絆を築くことが困難になる場合も少なくない。だから、血縁上の両親がその課題を達成できない子どもたちの場合、できるだけ養家に斡旋されることが望ましい。それによって、こうした子どもたちは“正常な”家庭生活に不可欠の贈物を受け取るのである。もちろん、こうした養育関係は、いつでも止めることができる。

両親がもう生きていない子どもたちにとっての良い道は、養子縁組だ。この場合、養父母はその子に対し、実の子と同様にあらゆる権利・義務を引き受けるのだ。……連邦共和国には、例えば実子がいないため乳児期の子どもでも喜んで養子に迎えようとする夫婦が比較的多い。彼らは、赤ちゃん時代に養子縁組をすることで、親子関係を極めて強いものにしたいと望んでいるのだ。」(16)

(3) 子どもたちには節度が必要だ

「空手タイガーを通しての教育

“君、今日の午後僕のところへ来ないか？そして僕らはビデオを見るんだ！僕の兄が、ちょうど『空手タイガー』を手に入れたんだ”。ボリスは少々当惑した。“さあ、僕は何とも言えないな。君が家でそういうフィルムを見ていることを知ってからというもの、僕の両親は、僕を君の家に行かせたがらないんだ。でも、君はいつだって僕の家遊びに来ていいよ”。“両親の言いなりになるなんて、君はまだ幼稚だなあ。もし僕の両親が僕に仲間のところへ行くのを禁じたら、僕だったら両親を適当にごまかすぜ！”“僕の両親だって、僕にダイレクトに禁止したりはしないさ。でも、両親がそうしたフィルムをどう思っているか、そして僕がそうしたフィルムを見ることを望んでいないことは、は

っきり言ったよ”。“そうか、それじゃあ君の両親はビデオを見ないのか？”とミヒヤエルは不思議そうに聞いた。“うちにはビデオがないんだ”。ボリスの口調に、ちょっぴり残念そうな響きがあったのは事実だ。何人かのクラスメートが、ビデオばかり見ている、さっぱりまじめな話ができなくなっているのが、時々彼の神経にさわってはいたのだが。

ミヒヤエルは、クラスの中でマッコとしてふるまいたがり、同級生に時々空手チョップを見舞っていたが、ビデオのない家庭があることなど思ってもみなかった。彼は教師の評判もあまり良くなかった。彼は教師にとっては、集中力のない、しばしば授業の妨げとなる生徒で、時々同級生に暴力をふるう存在だった。両親との話し合いも、これまで何の効果もなかった。彼の両親が、教師の説明をまったく理解できなかったからだ。彼らは、ミヒヤエルがたいがい家におり、こういう粗野なふるまいを教えるような友だちは一人もいない、とくり返し言い合った。それに、彼は何でもほしいものは手に入れているという。“必要な場合、あの子にはちょっと一発かましてやりますしね”とミヒヤエルの父は、彼の教育方法を説明した。

ボリスも、いつも天使というわけではなかった。しかし彼は一般に極めて社会性があると評価されており、彼のクラスメートは、彼は信頼できるし親切だと評価していた。最近、クラスのある女生徒が、学校で計画する農村体験にたぶん参加できない、母親は失業中で参加費用の350マルクを用意できないから、と言っているのを知って、彼はクラスを組織して町のお祭りにノミの市の屋台を出した。こうして彼らは160マルクをクラス銀行に入れ、その生徒に役立つことにした。

ボリスの両親もまた、いろいろ引き受けている。彼らは、最近の移住者や難民の受け入れを手助けするグループを組織した。彼らの教育方法についてボリスの両親はこう語っている。“私たちは、ボリスが小さい頃から、私たちの思い

にかなった行動をとる度にほめてやりました”。⁽¹⁷⁾

「基礎知識：教育

教育とは、とりわけ子どもたちの、行動や思考に影響を及ぼすことと特徴づけられよう。通常は両親が、子どもたちにとって最も重要な教育者なのだ。そして次第に、兄姉、親戚、知人あるいは子どもの友だちなども教育に関与するようになる。幼稚園、学校、クラブ、あるいは教会なども教育にあたることとなる。隠れた教育者、例えばテレビや宣伝なども、今日では子どもや青少年の行動や思考に少なからぬ影響を与えている。

両親が、自分たちの5才の娘が一人で着替えることを望む場合、彼らはこの望ましい行動に上位の教育目的をおいていることになる。この場合“自立性”だ。彼らが、自分たちの子どもが毎晩、自分の衣服をきちんと整理することに価値をおく場合、彼らは子どもに他の場面でも発揮される“秩序感覚”を育てようとしていることになる。両親が、意識的であれ無意識的であれ、めざしている他の教育目的には、例えば親切、誠実、従順、きちんとした礼儀作法、達成能力、節約…などがあり、いずれにせよ個々の両親により、力点のおきどころは異なるだろう。

子どもが自立して着替えができるようにするために、両親は例えば次のような行動をとるだろう。両親は、子どもが一人でシャツを着たら、ちゃんとほめてやる。あるいは、彼らは子どもに、一人で着替えができないと幼稚園には行けないよ、という。彼らは子どもと一緒に、誰が一番早く着替えられるか、競争するかも知れない。……

このような意識的あるいは無意識的に採用された両親の行動様式を、教育手段と呼ぶ。その際、いわゆる積極的な教育手段、例えば賞賛、褒美、確信を与える、習慣にさせる、模範となる、といった形と、消極的な教育手段、例えば脅し、命令、叱責、罰といった形とは区別される。積極的な教育手段は、長期にわたり効果が

ある。それは子どもに勇気を与えるからだ。それに対し消極的な教育手段は、しょっちゅう使うと、子どもたちが精神的に無感覚になったり、勇気を無くしたりする恐れがある。

子どもの年齢や成熟度も考慮しなくてはならないことは自明である。2才児に顔や体を洗うことの必要性を説明して理解させるのは困難だ。この場合は、タイミング良くほめてやることが、確実により適切だ。

基本法（ここに定められた原則は、他のすべての法律に適用される）は、両親に子どもを教育する権利を与えている。これは、誰であれ両親に対して例えば教育目的などを指定できないことを意味する。しかし、そのことは同時に、両親に対し教育への義務を負わせてもいる。両親が彼らの義務を果さず、あるいは親権を乱用した場合、両親から教育責任が取り上げられることもある。」⁽¹⁸⁾

（4）家族は変容する

「かつては、人口の大部分が大家族で農村で暮らしていた。次の文章は、かつての人間の生活条件・労働条件を垣間見せてくれる。

私はヴィンダーバルダー家のカールです

『私はヴィンダーバルダー家のカール、12才です。私には他に3人の妹がいます。2人の兄はもう亡くなりました。一人は生れて直ぐに、もう一人は2才の時ひどい咳で。

私たちの家では、たくさん仕事があります。みんなが畑や家畜小屋で、あるいは家の中で手伝わなくてはなりません。私の決まった仕事は、例えば家畜に餌をやることです。それ以外では、父か祖父が私に割り当てた場所で手伝います。一番若い息子の私がいずれは家の後を継ぐことになりますので、いまのうちから力いっぱい仕事に取り組まなくてはなりません。

私の祖父はもう60才位で、みんなが彼の言うことを聞きます。私は祖父から、まだまだたくさん学ぶことがあります。家畜が病気になったり、牛がお産したりする時には、常に祖父が中

心になります。彼がどうすれば良いかを熟知しているからです。

私の母も、畑や家畜小屋で働きます。その上、家事や庭仕事もとり仕切っています。祖母は重病で、多分もう床を離れることはできないでしょう。

子どもの頃から足の悪い叔父のハインリッヒの世話も、私たちがしなくてはなりません。彼には重労働はできませんので、皿、ナイフ・フォーク、あるいは子どもが遊ぶ木製の動物を彫刻するくらいです。

わが家の女中ルートとリースル、それにわが家の下男パウルも、家の一員です。ルートは、もう25年間わが家にいますが、私たち子どもに時々歌を歌ってくれます。リースルはつい1年前にわが家にきました。……パウルはよく、自分が渡り歩いた土地やそこで体験したことを話してくれます。…彼だけが、ある程度読み書きができます。彼は子どもの頃、2、3年冬の間だけ学校へ通ったからです。来年の冬には、私たちの村にも学校ができるそうです。

夜、編み物、つくろいもの、刺繍をしない時には、女性たちは綿を紡ぎます。その折、私の妹のリーザは、10才ですが、畑仕事の場合と同様に手伝います。男性は夜間はたいがい何かを修理したり、ほうきを作ったり、わら靴を作ったりします。

日曜日には、私たちはみんな一緒に教会へ行きます。お祈りが済むと、男たちはさらに“安らぎ”を求めに行き、女たちは墓地のあたりで、ひとしきり“おしゃべり”です。

年に2、3回ダンスがあります。ダンスの時にはリースルは何日も前から、すっかり上の空です。……』（カールは、多分1860年頃に生きていた。）⁽¹⁹⁾

「基礎知識：家族像

家族の像は、絶えず変化にさらされている。150年前までは、人口の大部分は農家の大家族で、つまり祖父母、結婚していない親族、それに下男や女中なども一緒に所属し、病気の時や

高齢になった時に世話をしてもらえらる集団の中で生活していた。19世紀の終り頃、どんどん工場ができて行くにつれ、ますます多くの人たちが自分自身の家庭を築くことができるようになった。大家族の数は次第に減少し、両親と子どもたちによって構成される小家族が、支配的な家族の形態となった。

家族は確実に危機に直面している。今日3組に1組の夫婦が離婚しており、母親あるいは父親が一人で子どもの教育にあたっている家族の数が、絶えず増加しているからだ。

こうした不完全な家族の場合に限らず、職業生活と子どもの教育とをどう統一するかという問題は、くり返し問われている。だから、より多くのパートタイムの職場の提供が求められている。子どもにとってより良好な保育の機会を求める声も、ますます高まっている。そこで全日保育園は、労働時間の関係でやむをえない両親のために、子どもを朝早くから夜まで保育している。年少の生徒が午後一人で放置されないように、全日制の学校も次第に増えている。

人々は次第に、外見にとられない生活共同体でも暮らすようになってきている。……

家族の機能の変化も、全般的に顕著だ。家族がかつて担っていた機能は、次第に他の施設に移されている。子どもたちの世話や教育は、例えば全日制学校がますます引き受けるようになっており、病人や高齢者の介護は、例えば福祉施設が引き受けている。

最近の姓の権利（夫婦別姓）も、伝統的な家族像の顕著な変化を示すものだ。……」⁽²⁰⁾

以上、実科学校用教科書『政治（社会科）』の中の家族に関する記述を抜粋して紹介した。

教科書では本文と「基礎知識」の他に、各項毎にいくつかの問いが設定されている。授業では、この設問をめぐる討論にかなりのウェイトがかけられると思われる。「家族は変容する」の項には、例えば「家族がもう担わなくなった、あるいは稀にしか担わない二つの機能は？」、

「家族構成の変化の原因ならびに根拠は？」といった問いが設定されている。

家族の変容は、ドイツ社会にも重大な問題を突きつけている。普通学校の社会科が最終学年の最終単元で、あらためて家族をとり上げていることは、問題の大きさを端的に示すものといえよう。以下、二つの教科書に即して、「変容する家族」がどうとらえられているかを見ることにしよう。

2 「変容する家族」をどうとらえているか (1)『二つの重点』の場合

社会科の最後の単元「われわれの時代の家族」は、この教科書では「家族：消滅するモデルなのか？」という見出しで始まる。本文の一部を次に抜粋しよう。

「家族像の変化」

ドイツ人の共同生活の変化は、この20年間で急激に進行した。

3分の1が一人暮らしだ。夫婦の3分の1が離婚している。大都市では2分の1という場合も珍しくない。4人に1人の子どもが、すでに実の両親の一方を欠いて成長している。いま生まれている子どもの2人に1人がそうなるだろうと、専門家は予測している。

30才以上のドイツ人の3分の1には、そもそも子どもがいない。以前には考えられなかった数字だ。

“生の源”がもはや生もうとしなくなった社会は、どうなることだろう？ 家族は人間の第二の、つまり“社会文化的誕生”を行っているとして現代ドイツを代表する社会学者の一人ルネ・ケーニツヒは言った。家族は、そのメンバーの方向づけや安定化に重要な寄与を行っている。社会というものの価値もまた、家族を経由して伝えられる。

結局、青少年に暴力的な傾向が拡がっているのも家族の崩壊と関係しているのではないかとしばしば推測されている。」⁽²¹⁾

「両親による教育（要約）」

両親は、子どもにとって最も重要な教育者だ。両親は子どもの行動や思考に影響を与える。その際、子どもが模倣するお手本になることが、重要な役割を演じる。賞罰を通して両親は、どのような行為が正しく、どのような行為が間違っていると思っているかを、子どもに示す。こうして両親は、自分たちの態度や行動様式を子どもたちに引き継ぎ、子どもたちを社会の中での生活に向けて準備する。」⁽²²⁾

「家族：社会のためにやっていること

家族は、社会に確実に貢献している。今日の子どもの明日の納税者で、子どもを持っていない人たちの年金や養護の責任まで引き受けるのだ。家族が公共のために果たすこうしたサービスは、家族の高い個人的コストで賄われている。しばしば子どもたちのために、一つの収入が絶たれる場合がある——少なくとも一時的には。ほかにもコストがかかる。家族にはもっと大きな住居が必要だが、住宅市場では不利になる。…一事が万事だ。子どもは今日、経済的に見れば、年配者にとってもはや将来の備えではなくなっている。家族とりわけ女性の活動で、社会は当り前のように生きているが、社会は、自力では再生できない社会の源泉を搾り尽くしていることに気づいていない。(ワルムフリード・デットリング)」⁽²³⁾

「家族の保護 (要約)

基本法は、家族は国家の特別の保護の下におかれる、と定めている。この保護は、国家が子どもを持つ家族を財政的に支援することにも現れている。そして子どもにかかる費用の一部は再調整されている。こうした財政上の支援には、例えば教育費、育児手当…その他家族のための税の減免措置がある。さらに、例えば、母性保護や育児休暇の規定もある。」⁽²⁴⁾

さらに教科書はドイツ人が持ちたいと望む子どもの数(全国平均)2.1人(最頻値3人)、現実の子どもの数1.4人(最頻値2人)をグラフで示しつつ(いずれも1990年頃の数値)、「子

もたち——喜びが重荷か?」と問いかけ、最後に「君の答えは?」と問うているのである。

(2)『昨日・今日・明日』の場合

「われわれの時代の家族

父親、母親それに子どもは、自然に与えられた一体性を形づくっている。

この一体性は、どの時代であれ、どの文化であれ、存在している。しかし“家族”という概念は比較的新しい。ローマ人が“家族”と呼んだのは、全体としての家共同体で、奉公人や奴隷も含まれていた。今日われわれは、両親と子どもとの生活共同体のみを“家族”と呼んでいる。家族はこの数十年間で確かに変化したが、しかし健全な家族だけが、子どもが健やかに発達するに必要な暖かさと安全とを提供できるのだ。

かつて家族にはどのような課題があったのか、いまはどうか?国は家族をどのように守り、かつ支えているのか?家族は危機にさらされている。出生率の低下と離婚率は問いかけている、家族は減びるのか、と。」⁽²⁵⁾

そして続く「家族は減びるのか」というパートは、「かつての大家族」と「いまの小家族」とを対比している。

「かつての大家族

『私たちは7人兄弟でした。男の子が4人、女の子が3人。2人の姉妹は生後まもなく亡くなりました。そうでなければ9人兄弟になるころでした。ですから私たちの母は、手一杯仕事をかかえていました。

育児のほかに、彼女は家事や畑仕事にも追われていました。彼女は家族全員のために食事を作り、貯蔵も引き受けていました。野菜や果物が実ると、私たちは皆でジャムづくりを手伝わなくてはなりません。冬は長く、私たちはほとんど自給自足でした。年に2回、家畜の屠殺がありました。その時以外にも肉やソーセージが食べられるように、燻製にしたり塩づけにしたりしました。そうすると何でも長もちし

ますから。

週に一度、私たちの母はパンを焼きましたが、その折私たち女の子は一緒に手伝わなくてはなりませんでした。そもそも私たちは、その後の人生に必要なことはすべて、家で学びました。料理、洗濯、縫い物、子どもや病人の世話、乳しぼりや野良仕事。男の子だけが、冬場は学校に行かなくてはなりませんでした。

私たちの祖父母は、農園を譲ってからは、隠居生活でした。ですから私の両親は、祖父母の世話もしなくてはなりませんでした。祖父母もそれなりにやっては行けたのでしょうか。私たちの祖母は、私たち子どもが病気になると、おとき話をしてくれました。ふだんは、祖母が一番年少の子ども二人のお守りをし、お勝手に母を手伝っていました。

祖父は高齢まで畑と一緒に仕事をしていました。彼は男の子たちに、種のまき方、馬や牛の使い方、雌牛が子を産む時の手助けの仕方など、農夫が知っていかなくてはならないすべてのことを教えました。

祖父が冬に時々ツイターを弾く折には、家族全員が部屋に集ってきました。わが家の3人の下働きの女たちや作男まで。私の父方の叔父ヨゼフは、きれいな声で歌いました。

大叔父のフランツだけが、卒中の発作を起こしてから寝たきりで、参加できませんでした。私の母と祖母とが、彼の看病をしていました。かつては家族の中で、すべてはこんな風に運んでいました。一生涯、生まれてから死ぬまで。』(ある年老いた農婦の回想)』(26)

「いまの小家族

構成

家族の像は、この100年の間に根本的に変わった。いまでは父親、母親それに1人の子どもが普通のケースだ。これを小家族という。

1900年頃には夫婦の3分の2が3人以上の子どもを持っていたが、いまでは夫婦のほぼ3分の2が1人かせいぜい2人の子どもしか持っていない。

近年では“不完全家庭”の数が無視できなくなってきた。未婚の母か、もしくは離婚後一人で子どもを育てている母親かだ。それに対し、一人で子育てをしている父親は、むしろ例外だ。ドイツ連邦共和国では、家族の約10%が不完全だ。

“不完全家庭”とは、結婚していない男女に子どもがある場合のことという。いわゆる未婚の夫婦の子持ちも確実に増えている。基本法は、未婚による子どもも、婚姻による子どもと法律上同等に扱っている。

課題

いまの家族は、19世紀の家族と比較すると、多くの課題を全面的または部分的に放棄しているが、しかし別の課題を引き受けてもいる。

労働時間が次第に短縮されるにつれて、家族には利用できる余暇(自由時間)が増えている。充実した家庭生活を送るには、余暇の有意義な過ごし方が重要な課題となっている。

家族の構成員が、職場で、あるいは学校で、不愉快なことや問題にぶつかった時、引き上げてきて、新たな力をとり戻す場所が家庭なのだ。』(27)

こうした本文の他に、「かつての大家族」には、「この家族には何人の人たちが所属しているか？君の家族の規模は？」「かつての家族には、どのような課題があったか？いまの家族が引き受けなくなった課題は？誰がそれを引き受けたか？」「男子の教育と女子の教育は何によって異なるのか？それについて君はどう思うか？」といった問いが、また「いまの小家族」には、「子どもを作らないか、作ってもせいぜい1人という夫婦がますます増えている理由は？」「今日失敗する夫婦がずいぶん多いのはなぜか。夫婦の離婚は、子どもにどのような結果をもたらすか？」といった問いが設けられている。

教科書はさらに家族を国の生の源ととらえつつ、森田芳光監督の『家族ゲーム』を思わせるような写真も交えて望ましい家族像を考えさせ

ている。そして単元の最後に1910年と1990年のドイツ国民の年齢構成を示す2枚のグラフを掲げている。前者は「ピラミッド」型、後者は「きのこ」型だ。本文は次の通りだ。

「わずか80年間で人口構成はすっかり変わった。二つの統計を説明してみよう。その際、とくに子どもや若者の集団と高齢者の集団に注目して。社会の高齢化は、どんな結果をもたらすか。とくに年金生活者の数の増加について考えてみよう。

人間は、従来通り家庭での幸せと安らぎを望んでいる。しかし自分子どもを持ちたいという希望は、著しく後退している。前の世紀では5人以上の子どもが少しも珍しくなかったのに、今日では1人か、せいぜい2人の子どもの家庭が主流になっている。子どものいない夫婦の数も次第に増えている。離婚する夫婦が多いため、片親が子育てをするグループも増えている。少なからぬ大都市で、3分の1の夫婦が離婚している。

今日の小家族が引き受ける課題は、かつての大家族に比べ少なくなっているが、しかし、次の世代の保護・教育は依然として家族の本質的な課題だ。それに余暇の過ごし方が加わっている。

わが国の生の源として家族は、基本法第6条でとくに保護されている。……両親は自分たちの子どもたちに対し、共同の保護・教育を義務づけられている。現状は、残念ながらそうはなっていないように見える。依然として母親が、自分で職業を持っている場合でさえ、子どもの教育や家事を主に負担しているからだ。

とりわけ母親は、国家によって保護されている。例えば産前産後、母親は健康を損なわないように労働を免除されている。育児休暇は、母親も父親も請求できるが、子どもの幸せのために、3才になるまで母親か父親が傍にいて安らぎを与えられるように特に配慮されたものだ。

国家は、さまざまな形で家族を支えている。……幼稚園、遊び場、子どもの家などで、国家

はとりわけ働く母親の負担を軽減している。

われわれの社会は“子どもに冷い”といわれる。

一方では少子化が、他方では年配者の長寿化が、超高齢化社会をもたらし、国家に大きな問題を突きつけている。国家はきちんとした家族政策で、夫婦の子どもを持ちたいという希望を支援するよう努めなければならない。同時に国家は、年金や老人養護のための財源確保にも配慮しなければならない。」(28)

『昨日・今日・明日』は、今日の家族さらには国家が直面している状況を以上のように整理しつつ、最後に次のように問いかけている。

「君は将来家庭を築こうと思っているか？君が幸せな家庭生活に期待するものは？

今日では年配者と若者とは、たいていバラバラに暮らしている。どうしたら年配者は若い世代の生活を爽り豊かにできるだろうか？」(29)

少子・高齢化社会の到来、離婚率の上昇…、家族の問題はドイツ社会にとっても深刻だ。答えは単純ではありえない。バーデン・ヴュルテンベルク州の社会教科書で見ると、ドイツはこの難問にたいし、とりあえず、人間にとっての家庭の、子どもにとっての両親のかけがえのなさを軸に、男性には家事・育児へのより多くの参加を求めつつ、女性には子どもにとっての親性、とりわけ母性の重要性の認識を求めることによって、事態打開のいとぐちを模索しているように思われる。

少なくとも、今日の家族の問題を「近代化」という歴史過程の中に位置づけつつ、子どもの教育（ないし社会化）にとっての両親（ないし家族）の第一義的重要性をあらためて確認してかかろうとするその姿勢は、われわれも共有して然るべきだろう。

また、年配者と若者とが今日、お互いにとって意味のある関係をどう取り結べるかという『昨日・今日・明日』の問いは、われわれもまた真剣に問わねばなるまい。

IV “家郷”の教育的・人間的意味の再発見を

——おわりに——

戦後日本の産業構造が大きく転換され、「地域・家庭の教育力の衰退」が如実に進行しつつあった70年代半ば、梅根悟はペスタロッチの『リーナハルトとゲルトルート』の中から次の一節を引き、あらためて教育の今日的課題を問うている。(国民教育研究所『年報』1973年度)

「領主様、あなた様がどんなにいろいろと、できるだけのことを村人のためになしておやりになっても、もしあなたが世間で学校親方と呼んでいるあの愚劣な教師を追っばらって全く新しい学校をお作りにならないと、あなた様の目的は果されないでしょう。領主様、どうですか。この50年ばかりの間に村の様子はすっかり変わってしまって、もう昔のままの学校では今の村人の現在や将来にはまるで間に合わなくなっているのです。

昔はみんな農業で暮していました。そこでは学校なんかいらなかったのです。家畜小舎や糞打ち場や林や畠がほんとうの学校だったので。そして彼等の行くところ、立ち止まるところ、至るところに、たくさんしなければならぬこと、学習しなければならぬことがあって、学校なんかなくても彼等は立派な人間になれたのです。しかし、今の糸つむぎをやっている少年たちのばあい、事情は全くちがっています。そこでは息子を思慮深い生活者に育てあげることではできません。だからなり行きまかせにしておくか、それとも学校を、その両親からはもう受けられなくなっているが、しかし絶対に欠くことのできない教育を両親に代って与える施設に改めるか、二つに一つしかないのです。」

(梅根訳)

これは18世紀末の、スイスの農村にもマニユファクチュアが浸透しつつあった時代の話だ。

近代の初頭においてすでに“家郷の訓”の衰退を認めた彼は、学校をいわば「第二の家庭教育の場」に変えることによって、新たな事態に対処しようとした。

ペスタロッチにせよ、若き日の彼が愛読したルソー(『エミール』)にせよ、近代批判・文明批判の要素を色濃く認めることができる。梅根は、彼ら近代教育思想の先駆者たちの正統な継承者であった。

前近代、すなわち資本主義が発達する以前の「家」(ないし家庭)は、家族(親戚・使用人を含む場合もある。明治初期の翻訳語「家属」が、むしろ適切かも知れない)と土地・建物とから成り、それぞれの家が生業(家業)を持ち、自前で生産・家事・育児の機能を営みつつ、高齢者・障害者の扶助・介護にも当たっていた。

生産労働(家業)の中心的担い手は男性であり、生命の生産(出産と初期育児)と再生産(家事)の主な担い手は女性であった。男女間(夫婦間を含む)、世代間の役割分担は、ドイツの教科書も記すように、かなり鮮明であった。

「近代化」の過程で、「家」(ならびに家連合ともいうべき「地域」)の機能や自立性は、市場社会ならびに公権力によって収奪され続け、そのツケが、なりふり構わぬ資本にとってまだ役に立たぬ子どもと、もはや役に立たぬ高齢者の上に重くのしかかっているのが、先進工業国とりわけ日本の現状だ。

人間が「近代化」の中ではまり込んだ袋小路から抜け出すには、“家郷”の教育的・人間的意味の再発見とその再構築が不可欠だ。高橋勇悦は、地域を「生活の拠点」であり「心の拠点」であると言っている。その通りだと思うが、人間にとってさらにベシクな拠点は、家族だ。

家族再生のテーマは、少なくとも、家族解体のしわ寄せを直接的に受けている子ども、ならびに高齢者の側から整理してみる必要性があるのだが、ここでは視点を「子どもから」に限定しよう。

資本主義社会は、あらゆるものを商品化するとはいえ、人間のすべての営みが商品化できるものではないし、また、すべきものでもない。

少なくとも生命の生産（妊娠・出産と初期育児）、そしてその再生産（どの範囲までか、という問題は常につきまとうが）は、家族の「聖域」として維持し続ける努力を、われわれは共に払うべきだろう。

妊娠・出産は女性にしかできない自然的分業に属する事柄だし、初期育児（つまり人間が人間になっていく第一段階）においても親性、とりわけ母性がかけがえのない存在であることについては、ドイツの教科書も詳細に指摘している。こうした当たり前の事実を強調せざるをえないところに、われわれの生きる「近代」という時代の闇の深さがある。

ペスタロッチのいうように、学校を「第二の家庭教育の場」に組み替えていく努力は、当然必要だ。ただ論理的順序としては家族の再生がそれに先行しよう。そして、子どもにとって不可欠の家族を今日再生させるカギは、おそらく「母性の復権」だ。30年程前から勢いのあるフェミニズムの新しい潮流が、この問題を混乱させている面があると思う。

布施晶子によれば、フェミニズムはフランス革命当時に登場し、その後欧米に広がった教育、経済、政治における機会均等を主張する思想だが、19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したスウェーデンのエレン・ケイ（『児童の世紀』の著者）のように母性擁護の立場から、母性を破壊する資本主義社会を鋭く批判する潮流も、とりわけ北欧やドイツでは有力であったという。（戦前の日本にも影響を与えた）⁽³⁰⁾

それに対し、アメリカの「ウーマン・リブ」の運動に刺激された新しいフェミニズムの場合、概していえば、母性尊重の要素は稀薄で、しかもマルクス主義の階級的支配・被支配関係を男女関係に置き換えようとする傾向も有力であった。70年代以降、こうした潮流が脚光を浴びたのは、おそらく、一つには「右肩上がり」

の成長を続けている時代の資本が女性労働力を安価に（しかも前後の見境もなく）調達するのを容易にしたからであり、また一つには資本主義批判の理論としてのマルクス主義の無力化に貢献する面があったからなのだろう。われわれは母性を擁護するフェミニズムをこそ、めざしたいものだ。

ドイツの教科書が印象的に描いている伝統的な家族の中の男女別、世代別の役割分担にしても、頭から因習として退けてはなるまい。人間の多年にわたる生活の知恵の集積として再評価すべき点多々あろう。伝統的な家族や地域の生活文化がまだ残っている場合、その継承の努力は当然払われて然るべきだ。

もとより、こうしたケースは少数派に属する。伝統的共同体の解体が大勢となって久しい今日、家庭の再生は「母性の復権」を出発点に模索していくとしても、地域の再生の足がかりはどこに求めたらよいのか。この点でも歴史の中に一つのヒントがある。

「近代化」の過程で新たな人口が集中しつつあった東京が、生活の激変に見舞われた最初は関東大震災だ。ここで江戸から明治へとつながる大都市の生活文化が根底から揺さぶられた。首都復興の一環として、新しい高層集合住宅が同潤会（のちの住宅公団）の手で建設されるのは昭和初年のことだ。この同潤会アパートの中には新しい地域づくりを明確に意図したのもあり、住民に「ここが故郷」の意識を根づかせたといわれる。

こうした戦前の日本人の生活の知恵が、戦後の日本の都市づくりには必ずしも受け継がれなかったのではないか。

われわれは戦後、概していえばヨーロッパは個人主義、日本は集団主義と思いついてきたが、『昨日・今日・明日』の「若者たちの生きる世界」の記述からもある程度うかがえるように、ドイツの方が日本よりも地域・家庭の人間のつながりを重視し、これを維持する努力を様々な形で重ねつつ、学校との新たな提携を模

索しているように思われる。(住民自治の伝統の違いもあろうが)⁽³¹⁾

「右肩上がり」の経済成長の時代、言い換えれば地域・家庭の解体＝「近代化」の時代がようやく一段落した今こそ、一方では日本人の生活の知恵を再発見・継承しつつ、他方ではある程度共通の問題をかかえる欧米諸国の経験(ドイツの母性保護の「家族政策」を含む)も参考にして、人間にとって「生活の拠点」でもあれば「心の拠点」でもある“家郷”の再構築に向け、息の長い努力を多様な形で開始するチャンスなのではないか。

もとより、かつての家庭や地域の自立性の再現はありえない。「近代」の所産である学校が、一面では地域・家庭の再活性化のテコの役割も果たしつつ、“家郷の訓”の肩代わりをどこまでできるか、学校の存在理由も今、あらためて問われているのである。

注

- (1) 98年9月、日本教育大学協会の研究集会が金沢大学で開催された折、全体シンポジウム「地域・家庭・学校の教育力の再生と連携をめざして」の企画・運営を私が担当した。

当日の基調提案者斎藤茂男氏は、その半年後急逝された。ご遺志を多少なりとも引き継げれば、と願っている。

なお、地域・家庭の問題では、高橋勇悦『家郷喪失の時代』(1981)、桜井哲夫『家族のミトロジー』(1986)、『ボーダーレス化社会』(1992)などに教示をえている。

- (2) 「基幹学校」と訳される場合が多い。
 (3) Bauer u.a., *damals-heute-morgen*. 7. 1996. S. 103.
 (4) ebenda. S. 104.
 (5) ebenda. S. 105.
 (6) ebenda. S. 110.

- (7) Schüler mit Verantwortung.
 (8) Bauer u.a., ebenda. S. 114.
 (9) ebenda. S. 114.
 (10) ebenda. S. 115.
 (11) ebenda. S. 116.
 (12) ebenda. S. 122.
 (13) ebenda. S. 123.
 (14) Fiederle (hrsg), *P wie Politik*. 1. 1995. S. 53.
 (15) ebenda. S. 55.
 (16) ebenda. S. 57.
 (17) ebenda. S. 63.
 (18) ebenda. S. 65.
 (19) ebenda. S. 83.
 (20) ebenda. S. 85.
 (21) Gerst u.a., *Doppelpunkt*. 9. 1995. S. 223.
 (22) ebenda. S. 227.
 (23) ebenda. S. 225.
 (24) ebenda. S. 227.
 (25) Bauer u.a., *damals-heute-morgen*. 9. 1996. S. 209.
 (26) ebenda. S. 210.
 (27) ebenda. S. 211.
 (28) ebenda. S. 218.
 (29) ebenda.
 (30) 『日本大百科全書』第20巻, 小学館, 1988. 103ページ. 「フェミニズム」の項。
 (31) もとよりドイツでも、高度消費社会・高度情報社会に伴う人間の個別分散化の流れは強い。だから、余暇をどう過ごすかが大きなテーマになっている。ドイツで長い伝統を持ち、若者の約半数が参加している地域スポーツをめぐる状況については、とりあえず、藤井雅人「ドイツにおける青少年フェラインスポーツ」、『スポーツ教育学研究』第18巻第2号, 1998, を参照されたい。